

わが国の子どもたちは、世界的にみて学力レベルは高いものの、人生の満足度や自己効力感が低いことが国際調査からわかっている。日本の子どもたちが、前向きな気持ちで未来に向かって進んでいけるようになるには、自分と社会の幸せを両立し、しなやかに生きるための資質・能力（アントレプレナーシップ）を身につけることが必要だ。その習得に「体験」が重要な役割を果たすことが分かっているが、家庭の経済状況や親の情報・意識格差によって体験格

明日への力

日本総合研究所

リサーチ・コンサルティング部門

マネジャー 木下 友子

81



差があるのが現状であり、これを解消することが課題である。体験格差をなくす取り組みはさまざまあるが、子どもたちに公平な体験機会を提供する取り組みはあまりない。そこで、日本総研では、公教育を通して社会の仕組みを学ぶ機会を公平に提供する（ことを目指し）、「子ども社会体験科」しくみ（以下、しくみ）を開発した。

レイを通じて学ぶ。学外体験施設では、子どもたちがロールプレイを通して、社会の関わり合いを疑似体験する。子どもたちは、それぞれに渡される1日の行動表に沿って活動し、複数の組織や人々との関わり合いを体感する。例えば、スーパールのブースでは、子どもたちそれぞれが、店長、企画、調達、販売など異なる役割を担い、タスクを遂行する。このタスクは、農家やエネルギー会社、市役所や銀行といったスーパに関わる組織やそこで働く人々が、互いに

が、日本総研が教育関係者や識者などの協力を得て作成した教材や教員向け資料を提供し、教育現場の負担軽減と体験前後の学びの質の平準化を図る。民間企業などからは、体験施設だけでなく学内授業を含めた包括的なスポンサーシップを受け、地域で社会体験カリキュラムを支える事業モデルの構築を図る。自治体教育委員会の共感・協力のもと公教育と連携して行うことで、子どもたちの体験格差をなくすことを目指す。

社会体験をすべての子どもたちへ 日本総研「子ども社会体験科しくみ」

ンドの教育カリキュラム「ユリテイスキュラ」から着想を得て、日本総研が独自に開発した。ユリテイスキュラは、学内授業と学外体験施設での社会体験活動によって構成され、同国の公教育の一環として小学6年生の約9割が参加している。国・自治体・民間企業・財団・教育機関など地域にゆかりのあるさまざまなプレイヤーがその運営に協力し、子どもたちの成長を支える。

しくみ）では、社会・経済・お金・仕事などのように回っているかを、全10回程度の学内授業と学外体験施設でのロールプレイングを通して学ぶ。また、子どもたちは就業者としての活動だけではなく、投票や納税、買い物といった市民・消費者としての活動も行う。こうした包括的な体験活動を通じて、社会の仕組みを理解し、さまざまな組織や人の持つ社会における役割の重要性を学ぶことを目指す。また、実際の社会の縮図に即した現実感のある体験ができるよう、学外体験施設は、公共機関のほか地域にゆかりのある民間企業や個人、NPOなどと連携して、地域の特性を反映させたブースから構成する。学内授業は、各学校の教員が実施する

しくみ）は、東京都渋谷区が自律した学習者を育てるために2024年度から本格化させた「シブヤ未来科」の一環として渋谷区内の小学校2校で試験導入されることになった。また、静岡県富士市のFUIJISプロジェクトエッグに認定された一般社団法人まちの遊民社が実施するキャリア教育プログラムにしくみ）のノウハウを提供することも決まっている。志を共にしてくださる皆様と、しくみ）を通して子どもたちの豊かな学びを実現したい。

※詳細な活動はこちらのQRコードからご覧ください。



*記事に関するお問い合わせは
red
web@nri.co.jp
までお願い致します。